
魂/Fate えいりあん来襲篇 えいりあんVS万事屋&真選組！侍ナメんなコノヤロー！！

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 / Fate えいりあん来襲篇 えいりあんVS万事屋&真選組！侍ナメんなコノヤロー！！

【Nコード】

N5442G

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

聖杯戦争が終わり、平和な日々を送っていた銀時達。だが宇宙から脅威が飛来し、新たな戦いが幕を開ける！

第一訓：大食いもほどほどにしないと食費がキツイ（前書き）

続編スタートです！
前作を読んでない方はそつちを先に読んだ方がよいと思います。
ではお楽しみ下さい！

第一訓：大食いもほどほどにしないと食費がキツイ

大宇宙。

そこには我々人類の知らない未知の生物が存在する。

そして未知なる生物は地球に近づいていた。

江戸の歌舞伎町の一角にあるスナック。そのスナックの二階に、なんでもやる『万事屋』がある。

「おかわりをお願いします」

金髪の美少女・セイバーがお椀を差し出した。

「銀ちゃん。私もおかわり」

赤いチャイナ服を着た少女・神楽もお椀を差し出した。

「オイ。何で私は”美少女”じゃないアルカ？」

「…テメーら俺を飢え死にさせる気か？」

銀髪で天然パーマ、死んだ魚のような目、この作品の主人公・坂田銀時が言った。

「もう飯ねーんだよ」

炊飯器の中は空っぽだった。

「これじゃ食費が…」

ツインテールで、赤い服にミニスカートを着た美少女・遠坂凜が険しい表情をする。

ちなみに銀時と凜は恋人同士である。

「何故、王である我が^{おれ}がこんなひどい思いをしなければ…」

金髪のライダースーツを着た男・ギルガメッシュが言った。ちなみに、みんなからは”ギル”と呼ばれている。

新しく万事屋メンバーに加わった凜、セイバー、ギルガメッシュは別の世界から来た人達である。ただしセイバーとギルガメッシュは人間ではなく、サーヴァントと呼ばれる使い魔で人間よりメツチャ強い。

「このままじゃ赤字だわ」

家計簿を見て凜が呟いた。

万事屋なんて商売がそう儲かるはずもない上に、神楽とセイバーの二大食欲魔王の食費でじり貧の生活を送っていた。

「も〜！これじゃ宝石が手に入らないじゃない！！」

凜が頭を抱えて声を上げる。

凜は普通の人間ではなく魔術師である。凜の魔術は宝石を使うものもあるのだが、こつちの世界に来てから宝石は手に入っていない。

「むう…申し訳ありませんギントキ」

セイバーが落ち込んで謝る。

「いや、んな落ち込むなよ…」

力無く銀時がそう言った。

「ギントキ。何か私にできることは!？」

セイバーが身を乗り出して銀時に聞いた。

実はセイバーは銀時に恋心を抱いているのである。

「…とりあえず食う量を減らせ…」

「う…」

顔を赤くしてセイバーは身を引いた。

「銀時。ちよつと思っただけど…私達の給料ちゃんと出るわよね？」

凜が聞くと銀時は何も答えない。

「凜ちゃん。銀ちゃんがちゃんと給料払うわけないアル」

酢昆布を食べながら神楽が言った。

「銀時」

凜が銀時を睨む。

「凜」

銀時が真剣な顔で凧を見る。

「今日も綺麗だな」

凧の目を真つ直ぐに見つめながら言った。

「な…！？急に何言うのよ!?!」

言われて凧は顔を赤くして慌てる。

「そんな事を言っただけで給料の事を誤魔化すつもりか?」

「おま…！言うなよギル!!!」

とギルガメツシュに言う。

「銀時い〜!」

凧が怒る。顔を真つ赤にして目を鋭くして。

「ちよ待てよ。お前が綺麗なのは事実なんだから…」

「うるさ〜い!!!」

凧が飛び蹴りを銀時の顔面に決める。

「ガバア!!!」

凧の蹴りを受けて銀時は倒れてしまう。

「やれやれ」

ギルガメツシュが呆れる。

「ギントキ!大丈夫ですか!?!」

「銀ちや〜ん。無事アルか?」

慌てて銀時に駆け寄るセイバー。神楽は特に慌てた風もない。

銀時は大の字で倒れていた。

「…パンツ見えた」

銀時がボソツとそう呟いた。

いつものように騒がしく始まった万事屋の一日。

「ちよつとおおお!まだ僕出てないですよおお!!!」

地味な眼鏡男・志村新八が突っ込みながら登場した。

*

真選組屯所。

その一室に隊士達が集まって座っている。

「よしみんな！今日も元気に市中見回りに行くぞ！」

声を上げたのは真選組の局長・近藤勲。

「おお！」

近藤の声に答えて隊士達は市中見回りに出た。

「おら行くぞ、総悟」

そう言ったのは鋭い目をしてタバコをくわえてる真選組の鬼の副長・土方十四郎。

「へーい」

そう言つてP Pをポケットにしたのは真選組一番隊長・沖田総悟。

こうして三人も市中の見回りに出た。

このまま何事もなく平和な日々が続くと思っていた。

だが宇宙からやってくる”脅威”によって、その平和は崩れる事になる。

第一訓：大食いもほどほどにしないと食費がキツイ（後書き）

またグダグダな小説が始まりました（笑）
温かい目で見守ってください。感想お待ちします！

第二訓：バカじゃなくてハタ

江戸の近くの山に隕石が落下した。ただの隕石ならこれで終わりだが、その隕石には恐ろしいヤツがついていた。

市中見回りをしていた真選組は急遽、幕府からの命令で隕石が落下した現場に向かった。

*

土方達が現場に到着した。

ドアを開けて外に出る。

現場には大きなクレーターが出来ていて煙が出ている。クレーターの中心には落下した隕石があった。

「こいつぁデケーな」

タバコに火を付けて土方が言った。

「うむ。ようやく到着したか」

後ろから声が聞こえて土方達は振り返る。

肌の色が紫で額から触覚を一本生やした男。

男の名はハタ皇子。央国星あつくくせいの皇子である。

そのハタ皇子の傍らには眼鏡をかけた、おつきのじいがいる。

「それで、俺達に何の用すか？」

タバコをくわえたまま土方がハタ皇子に聞いた。

「うむ。実はその隕石から生体反応があつての。もしかしたら未だ

発見されていない未確認生物かもしれん。その隕石を余の別荘まで運んでたもれ」

それを聞いて土方は右手で頭を抱えた。

このハタ皇子はバカが付くくらいの動物好きで、宇宙中の珍しい生き物を集めて飼っている。

「ホラ。わかつたら、さつさと隕石を運び出せ！」

じいが土方達に怒鳴る。

「しょうがない。やるぞお前ら」

近藤の声で渋々しながら隊士達は隕石を運び始めた。

「…面倒な事にならなきゃいいがな」

土方は嫌な予感がしていた。以前にもバカ皇子…じゃなくて、ハタ皇子のペットが江戸を騒がせた事があったからである。

「今、誰かバカって言ったか？」

*

夜。

江戸から少し離れたハタ皇子の別荘。

部屋には例の隕石があった。

「ウハハ！どのような生物なのかワクワクするの！のうじい？」

「左様でございますな皇子」

ハタ皇子の言葉にじいが答える。

ハタ皇子は隕石にペタペタ触って喜んでいる。

（ちっ！早く寝かせるよなバカ皇子！）

と心の中でじいが毒づく。

この時、二人は気付かなかった。隕石の下の亀裂から緑色の触手が出ていることに。

*

翌朝。

「ハタ皇子。いらつしやいませんか？」

幕府の使いが二人、ハタ皇子の別荘の玄関前でハタ皇子を呼んでいた。

「いないのか？」

「おかしいな」

二人が困っていると。

「何か用か？」

声と共に扉が開き、ハタ皇子が出てくる。

「ハタ皇子。いらしてたんですね。今日の午後に中央国星に帰国する

……」

「いや、余は少し用事が出来た。まだしばらく地球に滞在する」

「え？」

「じゃ、そういうことで」

そう言つてハタ皇子は中に入って扉を閉めてしまった。

二人は顔を見合わせた。

*

真選組屯所。

土方は浮かない顔をしていた。

「どうしたトシ？朝からそんな浮かない顔をして」

近藤が土方に話し掛ける。

「近藤さん……いや、ちよつとな……」

「ん？」

近藤が首を傾げる。

「あのバカ皇子……いつも生き物で騒ぎを起こしてたからな……今回も何か起きるんじゃないかと気になつてな……」

そう言つて土方はタバコの煙を吐く。

「その時はその時！俺達でなんとかすればいい！」

力強く近藤がそう言った。

「…そうだな」

近藤に言われて土方は頷いた。

「さあ今日も市中見回りに行くぞ！」

*

暗い真つ暗闇。

脅威はゆっくりと静かに、その魔の手を伸ばしていた。

第三訓：ツイントールって正式名称はツイーテールなの？（前書き）

感想お待ちしています！

第三訓：ツインテールって正式名称はツータールなの？

「ツインテールってなんかいいよな」

突然、銀時がそんなことを言った。

「え？」

凧が銀時を見る。

「急にどうしたんすか銀さん？」

新八が銀時に聞いた。

「いやホラ。今まで俺らの周りでツインテールの女っていないなかったじゃん。だから何か新鮮でさ。こつ：更に魅力的に見えてさ」

銀時が説明すると凧が顔を少し赤くした。

「ああ。まあ：確かに」

なんとなく新八も納得する。

確かに自分達の周りには凧が来るまでツインテールの髪型の女の子はいなかった。

(むう：ギントキはツインテールが好きなのですか：)

定春の頭を撫でながらセイバーはそんなことを思っていた。
その時。

ピンポーン

インターホンが鳴った。

全員が玄関の方を見る。

「ババアか？」

銀時が目を鋭くする。

そしてダツシュで玄関へ向かう。玄関の戸を勢いよく開ける。

「金はもう無えんだ！一昨日きやがれクソババア！！」
と怒鳴った。

だが玄関に立っていたのは大家さんのお登勢ではなく、サングラスをかけた黒服の男だった。

しばし呆然と男を見る銀時。

「……あの……どちら様で？」
「万事屋だな。仕事の依頼に来た」
「え？」

*

万事屋一行は今、ハタ皇子の別荘へ向かっていた。

「たくよ。何で俺達がああバカ皇子の様子見にいかなきやならねーんだよ」

愚痴りながら銀時が歩く。

「しょうがないですよ。そういう依頼なんですから」

依頼人は幕府の者で、依頼の内容は別荘にいるハタ皇子の様子を見に行くこと。

何度か別荘を訪ねたのだが、二日前にしばらく江戸に滞在すると言ったつきり応答がないのだ。

「どーせあアバカのことだ。新しい生き物でも見つけて家に引きこもってるんだろ」

やる気のない声で銀時は言った。

「ほらっ！銀時！新八君！早くしなさい！」

逆に凧は上機嫌で道を歩いていく。

（フッフ！幕府からの依頼なんだから報酬もたっぷり貰えるわ！これでやっとな宝石が手に入る！！）

笑みをこぼしながら凧は進む。

「上機嫌ですな凧は」

とセイバーが言った。

「相当金に困っていたからな」

とギルガメッシュが言った。

「お金いっぱい手に入ったら酢昆布食べ放題アルヨ！」

「わんっ」

神楽がはしゃいでる隣で巨大犬・定春も吠える。

「その野望ちつちやくない？」
と新八。

そして一行は八咫皇子の別荘の前に到着する。

「んじゃ、チャツチャツと終わらせて報酬貰うとするか」
そう言つて銀時は玄関のノブを掴んだ。

*

土方は落ち着かなかつた。あの隕石を見てからの胸騒ぎがどんどん強くなつていた。

「…か…さん…土…さん」

胸騒ぎのせいで市中の見回りに集中できない。

「土方さん」

「えっ!？」

隣にいる沖田の声でハツとなる。

「どうしたんですかイ土方さん？ポーツとして」

「いや…ちよつとな…」

そう言つて土方はタバコに火を付けようとした。

だが、ふとある違和感に気付き土方は手を止めた。

「総悟」

「土方さんも気付きやしたか？」

「ああ」

どうやら沖田も気付いていたようだ。今、二人は歌舞伎町の大通りを見回りしている。そこで二人は気付いた。

人が少ない。

昼間だというのに外を歩く人の数が少ないのだ。数えるほどしかない。

「どうやら土方さんの予感が当たつちまつたかもしれませんぜ？」
静かに沖田が土方に言った。

「総悟。一旦、屯所に戻るぞ」

そして二人は真選組屯所へ向かった。

*

無人だった。

鍵のかかった玄関をこじ開けて別荘の中を見て回ったが誰もいない。
ネズミー一匹もない。

二階にある八夕皇子の部屋。

「誰もいませんね」

と新八が言った。

「あのバカ皇子、誘拐でもされたアルカ？」

「ですが特に争った形跡はありません」

神楽の疑問にセイバーが答える。

「じゃあ…どこに…？」

新八は冷汗を流していた。

*

一階にあるキッチン。

「……………」

ギルガメッシュは辺りを見回す。やはり人の気配はない。

*

地下室の扉。

銀時と凜は地下室の扉の前に立ってる。

開けるぞ、と目で凜に合図する。凜が頷く。

そして扉を開いた。

第四訓：苦手なモノが現れたらとにかく逃げろ

地下室は真つ暗で何も見えない。壁に手を当て、手探りで明かりのスイッチを探す。スイッチを見つけて明かりをつける。

地下室には沢山の動物の檻のような物があった。八咫皇子が飼っていたペットが入っていたのだらう。だが、どの檻にも動物は無く、檻には食い破られたような跡があった。

「…どうなってるんだ？」

銀時が頭を掻く。

「ここで何かあったことだけは間違いないわ」
凜が真剣な顔で言った。

「とりあえず。その辺を見てみましょう」

そう言つて凜が歩き出した。

「凜」

銀時が凜を呼び止めた。

「何？」

凜が銀時に振り返る。

「その…なんだ…：…気をつけるよ」

少し照れた感じで銀時がそう言った。

「わかってるわ」

凜は笑顔で返事をした。

二人は分かれて地下室を見て回る。

普段は動物の鳴き泣で騒がしかったであろう地下室には今は二人の足音しかしていない。

ズルッ

凧の背後で何か床を這いずる音がした。
凧が後ろを振り返る。

”何か”が自身へ迫る。

「く…！」

凧は身を低くして”何か”をかわそうとする。

ブシュッ

凧の右肩を”何か”が掠める。バランスを崩して凧が床に倒れる。

”何か”は倒れた凧目掛けて迫る。

バアン

風船が破裂するような音がして”何か”の頭がバラバラになる。

「銀時！」

凧の前に木刀を構えた銀時が立ってる。銀時が木刀で”何か”の頭を叩いたのだ。

「凧！大丈夫か！？」

「大丈夫よ。それより…！」

肩の傷を押さえて凧が立ち上がる。視線を下に向ける。

床には凧を襲った”何か”があった。

ソレは緑色で巨大なへびのようだった。以前ターミナルを襲った寄生型えいりあんに似ている。

「気持ち悪いな。何だコイツ？」

銀時がソレに近づこうとした時。

ドガアアア

床を壊して沢山の緑色のへびが現れる。

「い…！？」

銀時が顔を青くしてソレを見る。

「何なのよコイツ！？」

凧が驚きながら身構える。

「凧…！」

銀時が後ずさる。

「逃げるぞおおお！！！」

叫びながら銀時は凜の手を引いて走り出す。

「ちよっ…銀時！」

凜の言葉も無視して銀時は地下室を出る。

緑色のへびが銀時達を追う。

「新八ー！神楽ー！」

銀時が二人を呼ぶ。

「セイバー！ギル！」

凜も名前を呼ぶ。

「銀さーん！！」

新八、セイバー、神楽の三人が階段から下りて廊下を走ってくる。

「新八！無事…」

新八達の後ろには緑色のへびが迫っていた。

「銀さああん！助けてえええ！！」

「ぎゃああああ！！こっち来んなああ！！」

銀時は新八達に背を向けて、凜を連れて走り出す。

「ちよっとおお！置いてかなでくださいよおお！！」

緑色のへびが新八に迫る。

「うわあああ！！」

新八が悲鳴を上げる。

「新八！！」

神楽とセイバーがそれぞれ武器を構える。

その時。

「王の財宝！」
ゲイト・オブ・ハビロン

声が出た瞬間、無数の剣と槍が緑色のへびの群れに突き刺さる。

「ギルガメツシュ！」

セイバーが自分達を助けた男の名を叫ぶ。

「早く外に出ろ！！」

「ギル、助かったアル！」

新八を片手に持って神楽が走る。

ガシャアアアン

窓を破つて全員が外に出る。

外に出た銀時達はそれぞれ武器を構える。

だが緑色のへビは外に出た銀時達を追わず、別荘の奥へと引っ込んでいった。

緑色のへビがいなくなったのを確認して武器をしまつ。

「わんわん！」

外で待つてた定春が銀時達に駆け寄る。

「定春！」

神楽が定春に抱き付く。

「な…何だつたんですか今の！？」

息を乱して新八が聞いた。

「知るかよ。バカ皇子のペットじゃねーの？」

「あつ！」

神楽が声を上げる。

「もしかしてバカ皇子、あの化物に食べられたアルカ！？」

「可能性はありますね」

セイバーが神楽に答える。

「凜。傷は大丈夫か？」

凜に近寄る。

「大丈夫よ。ちょっと掠つただけ」

そう言う凜の右肩からは血が出てる。

「しょうがねえな」

と言いながら銀時は着物の裾を破いて包帯代わりに凜の右肩に巻く。

「ほれ。これで大丈夫だろ」

「…ありがとう」

顔を赤くして銀時に礼を言った。

「で？アレをどうするのだギントキ？」

ギルガメッシュが銀時に聞いた。

「こつこつ厄介事はあいつらに任せればいいんだよ」

「あいつら？」

凜が首を傾げる。
「真選組だよ」

第五訓：山崎の趣味はミントンとカバディ

真選組屯所。

近藤は土方からの報告を受けていた。

「外にはほとんど人はいねえし、建物の中からも人の気配はしなかった」

近藤は静かに土方の話聞いた。

「街で何か異変が起きてるのは間違いねえ」

「そして、その原因は例の隕石にあると考えてるんだな？」

近藤が土方に聞いた。

「確証はねーが：そんな気がしてならねえ」

「よし。それじゃあ隊士を連れて八塔皇子の別荘に向かうぞ」

そう言つて近藤と土方が立ち上がる。

その瞬間。

ドガアア

床の畳が破られ、銀時達を襲ったのと同じ緑色のへびのようなものが現れる。

「な…!？」

「何だコイツは!？」

二人とも目を見開いて驚く。

緑色のへびが土方と近藤に襲い掛かる。

最初は驚いた二人だったが、すぐに冷静になり腰の刀を抜く。刀を横薙ぎに振つて緑色のへびを斬り捨てる。

「ここじゃ狭い!外に出るぞトシ!」

二人は緑色のへびを斬り捨てながら襖を蹴破ひすまつて外に出る。

「土方さん。危ないですね」

声が出た直後、バズーカが発射される音がした。

バズーカの弾は土方の前に迫ってた緑色のへびの群れに直撃し、大きな音を立てて爆発した。

「土方さん。大丈夫ですかイ？」

バズーカを担いで歩きながら沖田が土方を呼んだ。

「総悟！」

沖田を見て近藤が声を上げた。

「テメー！総悟！！」

怒鳴りながら土方が煙の中から出てくる。

「まあまあ土方さん。いつもの事じゃないですか」

「ふざけんな！このガキヤ！」

土方が沖田に斬りかかるうとする。

「待て！落ちて着けトシ！今は二人で争ってる場合じゃないだろ！」

近藤が二人の間に入る。

「そうですね土方さん。状況を考えてくださいえ」

「お前が考える！！」

「局長ー！」

沖田と土方が言い争っていると、真選組の山崎退がやってくる。

「山崎！」

近藤が山崎に気付く。

「もう屯所内には俺達以外誰もいません！」

「なんだと！？」

山崎の報告に土方が声を荒げる。

「屯所中あの緑色のへびでいっぱいです！早くここから離れないと
！」

「ちっ！」

土方が舌打ちする。

「…お前ら！ここから離れるぞ！」

近藤が土方達に言った。

「近藤さん!？」

「あいつらはそう簡単にはくたばらん!」
険しい表情をして土方にそう言った。

悔しそうな顔をしながら全員屯所を出た。近藤が屯所の方を振り返った。

「…すまんみんな」

そう言って前に向き直り、走った。

*

ハタ皇子の別荘から脱出した万事屋一行は真選組の屯所を目指して走っていた。

「どういうことでしょうか?人が一人もいません」

セイバーが周りを見てそう言った。

ハタ皇子の別荘と同じで街も無人だった。

「まさか…ここにもヤツらが!？」

新八が声を出した。

「あの別荘だけじゃなかったの?」

「どうやらこの世界でも面倒な事が起きているようだな」
とギルガメッシュが言った。

やがて大きな十字路に着いた。
すると。

「ゴリラアル!」

神楽が前を指差して叫んだ。

「土方さん達も!!」

新八も声を上げた。

前から近藤、土方、沖田、山崎が走ってくる。

「あつ!万事屋!!」

近藤達も銀時達に気付く。

十字路の中心に集まる。

「お前ら何でこんな所にいるんだ？」

銀時が土方達に聞いた。

「テメーらこそこんな所で何してんだ？」

と土方が銀時に言った。

「そのセリフをそのままバットで返してやるよ」

「そのセリフをさらにバットで……」

「いや、いつまで経っても終わんねーよ！」

新八が突っ込んだ。

「皆さん一体どうしたんですかイ？」

沖田が万事屋一行に聞いた。

「実はこの街から少し離れた別荘で緑色のへびのような生き物に襲われたのです」

セイバーが沖田に答えた。

「緑色のへびだつて!？」

近藤が驚く。

その時、地面から音がした。

「ん？」

全員が地面を見た。地面が音を立って揺れる。近くのマンホールがガタガタと音を立てる。

バアーン

複数のマンホールのフタが音を立って空に飛んだ。

そしてマンホールの穴からソレは出てきた。

第六訓：なんやかんやで万事屋と真選組は協力する

複数のマンホールの穴から巨大な緑色の物体が出てくる。

緑色の物体の正体は束になったへびのような生物だった。

「ぐ…グロいな…」

束になった緑色のへびを見て銀時が言った。

「ど…どうするんですか！？ 囲まれちゃいましたよ！！」

うるたえながら山崎が言った。

マンホールの穴から出てる緑色のへびの大群は、十字路の中心に立ってる銀時達を囲んでいた。

「うるたえるな雑種」

ギルガメツシュが前に出る。

「我がこいつらを片付けてやる」

「何？」

ギルガメツシュの言葉に土方が目を細める。

「王の財宝！」

そう言った直後、ギルガメツシュの背後の空間が歪み、無数の剣や槍などの宝具が現れる。

「な…！？」

突然現れた無数の宝具に真選組の全員が驚いていた。

「汚らわしい雑種が。我の前から失せる！！」

パチン

指を鳴らした直後、無数の宝具が雨のように緑色のへびの大群に降り注いだ。

それぞれが必殺の威力を誇る宝具の雨に撃たれ、緑色のへびの大群は次々と朽ちていった。宝具の雨は止むことなく、緑色のへびの大群に降り続ける。

しばらく撃ち続けると、緑色のへびの大群はマンホールの中へと戻って行った。

死んだ緑色のへびは緑色の液体になり、銀時達の周りには緑色の液体の水たまりが沢山できていた。

「フン。血の色も汚らしい」

ギルガメツシュの圧倒的強さにみんな絶句している。

「あ…アンタ…一体何者だ…？」

動揺しながら近藤がギルガメツシュに聞いた。

「我は英雄王ギルガメツシュだ」

威張りながらギルガメツシュが答えた。

「答になつてねーぞ」

土方がギルガメツシュを睨む。

「落ち着けトシ」

銀時が土方を止めた。

「いや、お前がトシって呼ぶんじゃねーよ…！」

土方が怒鳴った。

「うるさい！アンタ黙ってて！」

凜が土方に怒鳴る。

「いや、お前…今のはコイツが…」

「そんな事はどうでもいいわよ。今はこの状況を考えるのが先決でしょー！」

土方は仕方なく引き下がった。

*

それぞれ今までの出来事を話して状況を整理する。

「てことは、お前らが運んだ隕石に例の緑色のへびがついてたって

のか？」

銀時が真選組に聞く。

「はい。あの隕石には生体反応がありましたから多分そうだと思います」

山崎が答える。

「なら別荘に緑色のへびを操ってる本体がいるはずね」

凧が確認するように言った。

「だったらやることは一つね。別荘にいる本体を叩くわよ」

「それしかねーわな」

銀時が凧の案に答える。

「でも…ソイツを倒してもいなくなった人達は…」

新八が沈んだ声で言った。

「いなくなつた人達も捕まっただけで、まだ生きてるかもしれないわ。希望を捨てるのはまだ早いわよ新八君」

新八を励ますように凧が言った。

「…そうですね…遠坂さん…ありがとうございます」

凧にお礼を言う。

「行きましよう！銀さん！」

元気を取り戻して新八が言った。

「銀ちゃん！早く別荘に殴り込むアル！」

「わんっ！」

神楽が腕をブンブン回し、定春も力強く吠える。

「私も力を貸します」

セイバーは既に鎧姿になっている。

「あの様な雑種に好き勝手させるのは王の我が許さん」

ギルガメッシュも黄金の鎧を着ている。

「お前ら…」

新八達を見る。

「銀時」

呼ばれて凧の方を振り返る。

「行きましよう銀時」

力強い笑みで言った。

銀時も微笑む。

「しようがねえ。そんじゃ行くか」

と銀時が答えた。

「トシ！総悟！山崎！俺達、真選組も行くぞ！！」

近藤が声を上げた。

「もちろんだ近藤さん」

土方が力強く答えた。

「わかりやした」

そう言つて沖田はバズーカを担ぐ。

「もう、こうなったらどこまでもついて行きますよ！！」

半場ヤケクソ気味に山崎が答えた。

「よし！行くぞテメーら！！」

先頭に立つて銀時が声を出した。

「テメーが仕切んな！！」

「んだコラア！！」

また銀時と土方の言い争いが始まる。

二人を止めようとした時。

「助けてくれ！！！」

助けを求める声が聞こえた。

第七訓：生き物は身を守るための能力を持っている（前書き）

桂「フハハハハ！ついに俺の出番がやってきたぞ！」

第七訓：生き物は身を守るための能力を持っている

時刻は夕方。

「助けてくれ〜！」

助けを求める声が聞こえた。

全員が声のした方を見た。男が一人、銀時達に向かって走ってくる。

「まだ街に人が!？」

セイバーが声を上げる。

走ってくる男の姿がハッキリ見えてきた。

男は黒いサングラスにアゴヒゲを生やしていた。

「マダオだあ!!！」

男を指差しながら神楽が声を上げた。

「マダオ?」

セイバーが首を傾げる。

「マダオじゃねえ!長谷川だ!!！」

男が怒鳴った。

男の名前は長谷川泰三。元入国管理局の局長で妻にも別居されて無職の”まるでダメなオッサン”略して”マダオ”である。

「長谷川さん!無事だったんですか!？」

新八が長谷川に駆け寄る。

「本屋で…バイトしてたら…いきなりヤツらに襲われて…」
息を切らしながら長谷川が言った。

「緑色のへびですね?」

セイバーが長谷川に聞いた。

「いや!緑色のへびみたいなヤツだけじゃねえ!」
顔を上げて長谷川は言った。

「え？」

その時、長谷川がやってきた方から声が聞こえた。

「いいっ！！！」

怯えて長谷川は後ろを振り向いた。

銀時達も声が見る。

ウ〜ウ〜

唸り声のような声がある。道の向こうからヤツらが来た。ソレは緑色のへびみたいなのではなかった。人の形をして色は緑色で、体は腐ったようにドロドロとしている。まるで西洋の死霊『ゾンビ』である。

「ぎゃああああ！！！」

銀時と土方が同時に悲鳴を上げた。

「な…なな…何じゃありゃあ！？」

「ぞぞ…ゾンビか！？！」

怯えながら銀時と土方が言った。

「まさか…江戸の住民が！？」

声を震わせて新八が言った。

「そんな…！！！」

山崎が地面に膝を着く。

「あきらめるのは早いぞ！」

突然、銀時達の背後から声がした。

「え？」

全員が後ろを振り向く。

そこにいたのは…。

「ヅラ！！！！？」

「ヅラじゃないキャプテン・カッターだ」

うっとうしい長髪、左目に眼帯をして、海賊の衣裳を着てる男・キャプテン・カッターが立っていた。

本名は桂小太郎。幕府を倒そうとしてる攘夷浪士だが、今では穏健派となっている。

「あきらめるには早いつて、どういことですかイ？」

沖田が桂の変装に気付かず聞いた。

「ヤツらは江戸の住民ではない」

ハッキリと桂はそう言った。

「じゃあヤツらは一体何なんだ！？」

今度は近藤が聞いた。

「…本当に真選組は誰も気付きませんね」

新八は呆れた。

「ヤツらは”クローン人間”だ」

「えっ!?!」

全員が驚きの声を上げた。

「えいりあんが身を守るために襲った人間の遺伝子から作ったんだろ。だがクローンと言っても完璧ではない。本体のえいりあんの知能が低いせいか、それとも人間の体の構造が複雑なせいか、おそらく両方だろう。そのせいで不完全なクローンしか出来んだ」

桂がみんなに説明した。

「では江戸の住民は!？」

セイバーが聞いた。

「落ち着け。ヤツは捕らえた人間は殺さん」

桂が答えた。

「何でた？」

土方が聞いた。

「ヤツは餌として捕まえた生き物はすぐには食い殺さず、自然に死ぬまでゆっくりと栄養を奪っていくのだ」

「ということは…」

「江戸の住民は皆生きている」

桂が新八に答えた。

「では、すぐにえいりあんを倒して江戸の住民を救出しましょう!」
セイバーが声を上げた。

「おう!江戸の住民を護るのが真選組の使命だ!」

桂の話でみんなの士気が上がる。

「ところでお前、何でそんなに詳しいんだ？」

土方が桂に聞いた。

「俺は宇宙キャプテン・カッターだ。宇宙生物の事で知らない事はない」

そう言っつて桂は土方に背を向ける。

「どこに行く？」

「仲間のエリーザベスがいなくなつてな。探しにいかねければならん」

桂が銀時に近づく。

「頼んだぞ銀時」

そう言っつて銀時の横を通り過ぎた。

「テメーも気をつけるよ。ツラ」

「ツラじゃないかつ…キャプテン・カッターだ」

そう言っつて桂は去つていった。

「んじゃ本体叩きに行くぞ。どっちに行くんだ？」

銀時が聞くと。

「…あつちよ」

凜が指差した方には沢山のゾンビみたいなクローンの群れがいた。

「……マジでか？」

顔を青くして銀時がそう呟いた。

くおまけ

凜

「ねえ銀時。一つ気になる事があるんだけど」

銀時

「何だ凜？」

凜

「第二訓で幕府の二人が見た八夕皇子は、えいりあんが作ったクローンなの？」

銀時

「どうなんだ新八？」

新八

「えっと……作者に聞いたらクローンだって言っていました」

凜

「でもそれだと、えいりあんは不完全なクローンしか作れないってところと矛盾するわよ？」

新八

「たしかに」

銀時

「おいおい。作者の奴何やってんだよ。設定グダグダじゃねーか」

神楽

「わかったアル！ハタ皇子はバカだから作りやすかったアルヨ！！」

銀時

「あーそうか。バカだから作りやすかったんだ」

神楽

「バカだからアルヨ！」

凜

「…こんなんでもいいの？」

新八

「はは…」

第八訓：マダオにはいろんな意味がある（前書き）

銀時「感想・コメントよろしくね（ダブルピース）」

作者「よろしくお願いします」

第八訓：マダオにはいろんな意味がある

ゾンビのようなクローンの群れを突破しなければ別荘へ行くのになり遠回りになる。

「ちっ。仕方ねえ」

銀時が腰から木刀を抜いて言った。

「行くぜお前ら！」

「「「おおっ！！」「」」

全員がクローンの大群に突っ込んだ。

銀時は木刀でクローンを斬り捨てる。凧はガントでクローンを撃ち倒す。新八はその辺に落ちた鉄パイプでクローンを倒す。神楽は手に持つてる傘で雑払う。定春は突進して吹っ飛ばす。セイバーも不可視の剣で斬り伏せる。近藤達『真選組』も刀でクローンを斬る。山崎はミントンのラケットで倒してる。

「ゲート・オブ・バビロン！！」

ギルガメッシュは銀時達に当たらないように宝具を飛ばしてクローンの大群を蹴散らす。

そんな中。

「あっ！！」

神楽が声を上げた。

「どうしたの神楽！？」

凧が神楽の方を振り向いた。

「マダオのクローンアル！！」

と言って神楽が一体のクローンを指差す。

そのクローンは髪は所々ハゲて、顔は少し腫れあがって、腕も片方無い。けどなんとなく長谷川とわかる。

他のクローンよりも出来が酷い、まるでダメなクローン、略して”

マダクロ”である。

「いや酷過ぎだろ!!」

長谷川が突っ込んだ。

「なんで俺のクローンだけあんな出来酷いんだよ!? 明らかに悪意があるだろ!!」

「マダオのクローンならアレで十分ヨ」

「ちくしょう!!」

神楽の言葉を聞いて長谷川は自分のクローンに向かって走り出した。
「消えるおおお! 俺の悪夢! マジで駄作な俺のクローン! 略してマダオオオオ!!」

叫びながら長谷川は自分のクローンの顔を殴り、クローンの顔は粉々に砕け散った。

不完全なクローンなので力は弱く、体の強度はかなり脆い。なので数は多かったが、それほど苦戦はしないで銀時達は進んでいった。

*

八タ皇子の別荘がある山に入る。

山道を走る万事屋と真選組。

「もう少しで別荘です!!」

走りながら新八が言った。

「おい! アレ!」

土方が足を止めて上を指差す。

全員が足を止める。

目の前に巨大な影があった。

「これは…!!?」

セイバーが驚く。

銀時達の前に現れた巨大な影は、緑色のヘビだった。大きさはおよそ十メートル。

「デ…デカい!!」

新八が後ずさる。

「キシャアアアア！」

巨大へびが鳴き声を上げながら銀時達に迫る。

「失せる雑種！！」

ギルガメツシュが宝具を発射した。宝具の雨が巨大へびに当たる直前。

バツ

巨大へびは無数の人間並の大きさのへびになってバラけ、宝具の雨をかわした。

「何っ！？」

ギルガメツシュが目を見開いて驚いた。

無数のへびが銀時達に襲い掛かる。

「ちい！」

舌打ちしながら銀時は木刀を振るってへびを薙払う。

「おのれえ！雑種如きがくだらん小細工を！！」

ギルガメツシュも剣を手にしてへびを斬り捨てる。

大量のへびを相手にしていると、またクローン軍団が現れる。

だが現れたクローンは街で戦ったのと違って肌の色は緑色ではなく、ちゃんと人の肌の色で、ドロドロとしていない。

「銀さん！こいつら街で戦ったヤツらより完成度が高いですよ！」

クローンを倒しながら新八が言った。

「どうなってるんだ！？」

クローンを斬りながら近藤が叫んだ。

「何度もクローンを作ってる内に上手くなったんですかね？」

バズーカをぶっ放しながら沖田が言った。

「知能が低いんだか高いんだかわかんねーな！」

とへびを斬りながら土方が言った。

沢山の緑色のへびと完成度が上がったクローンに少し苦戦しながらも全部倒し、銀時達は別荘に向かった。

*

辺りはもう暗くなっていた。

銀時達はようやく八咫皇子の別荘の前にたどり着いた。

「や…やつと着きましたね」

と息を乱しながら新八が言った。

「気を抜かないでくださいシンパチ。ここからが本番です」

そう言うセイバーはまだまだ余裕がある。

「いやあそれにしてもギルとセイバーさんがこれほどまでの強さとは。ギルなんて沢山の剣飛ばすし。一体、二人は何者なんですか？」

「おい。今お前、我の事”ギル”って言ったか？」

近藤を睨みながらギルガメツシュが言った。

「えつと…セイバーさんとギルさんは『サーヴァント』っていう人間の力を超えた存在なんです」

新八が簡単に説明する。

「道理で化物じみた強さのはずだ」

土方がタバコに火をつける。

「いえ。私達から見ても貴方達は強い。この一件が終わったならば是非手合わせ願いたい」

とセイバーが言った時。

ビキッ、ビシイ

別荘の壁に亀裂が入る。

全員が別荘を見る。

亀裂はどんどん別荘に広がる。

バガアア

大きな音を立てて別荘が崩れる。崩れた別荘の中から巨大な黒い影が現れる。

現れたのは全長五十メートルくらいの頭が二つある巨大な緑色のへビだった。

第九訓：マダオの本体はグラス

別荘を破壊して超巨大な緑色のへびが現れた。
それを見て全員が声を揃えて言った。

「マジでか？」

巨大へびのえいりあんは銀時達を睨みつけてる。

「ちよっ…で…デカすぎですよ！！こんなんどうやって戦うんですか！？」

新八が声を震わせながら叫んだ。

「いえ。大きければ好都合です」

セイバーが前に出る。

「リン。宝具を使います」

「ええ。任せたわセイバー」

凜が頷きながら答える。

「宝具って何ですか？」

山崎が凜に聞いた。

「口で説明するより見た方が早いわ」

そう言って凜はセイバーを見た。

セイバーが『風王結界』を解放し、黄金の剣『エクスカリバー』が現れる。

「黄金の剣！？」

土方が驚く。

「エクス」

セイバーが宝具の真名を解放する。

「カリバー！！！」

振り下ろされた聖剣から黄金の刃が放たれる。

真選組や新八、神楽が目を見開いて驚く。

放たれた黄金の刃は一直線にえいりあんに向かっていった。

黄金の刃がえいりあんに当たる直前。

シュバツ

えいりあんは巨体に似合わぬ素早さで体を捻って黄金の刃をかわした。

「な……！！？」

エクスカリバーをかわされてセイバーが驚愕の表情で驚く。

「うそっ！？セイバーのエクスカリバーをかわした！？」

凜も驚く。

「うおおお！カッター！！セイバー！今の何アルカ！？私もやりたいアル！！」

神楽はエクスカリバーを見て興奮してる。

「あ……アレが宝具……！？」

山崎は驚いて腰を抜かしてる。

近藤は驚いて開いた口が塞がらない。

「確かに威力は凄そうだが、当たらなきゃ意味がねーな」

土方が冷静に言った。

「セイバーさん！その宝具で土方さんを消してくださいせエ！」

と沖田が言った。

「テメーを消してやろうか総悟」

そう言っつて土方は沖田を睨む。

そんな言い争いをしてると、えいりあんが銀時達に襲い掛かる。

全員が後ろに下がって、えいりあんは突っ込んだ頭が地面に刺さる。

「この野郎！！」

土方が刀で上段からえいりあんの太い首を斬る。

だが、えいりあんの傷は瞬時に治る。

「何っ！？」

土方が一步退く。

ギルガメツシユも宝具を発射して、えいりあんの体に突き刺さるが、えいりあんは刺さった剣を抜いて瞬時に傷を治す。

「おのれえ！」

ギルガメツシユが歯噛みする。

えいりあんの二つの頭が銀時達を襲う。

「おい！お前ら！」

今まで隠れて戦いを見守ってた長谷川が出てきた。

「どうしたんですか！？」

新八が長谷川に聞いた。

「緑色のへびとクローンが来やがった！！」

長谷川は森の中を指差して言った。

森の中から緑色のへびとクローンの大群がやってきた。

「おいおいマジかよ」

銀時が冷汗を流す。

「あつ！マダオのクローンアル！」

また神楽が長谷川のクローンを発見する。

他のクローンは普通の人間と大差ない出来だが、長谷川のクローンだけ緑色でドロドロしてる。

「いや、おかしいだろ！？」

長谷川が声を上げた。

「他のクローンは出来いいのに、何で俺のだけ出来悪いんだよ！？やっば悪意があるだろ！？」

自分のクローンを指差して怒鳴る。

「わかった！マダオはグラサンが本体ネ！だからグラサンの無いマダオのクローンは出来が悪いアル！！」

「俺の本体グラサン！？」

泣きながら長谷川が叫んだ。

「ちよつとお！そんな事言ってる場合じゃないでしょ！！！」

新八が鉄パイプでへびやクローンを薙ぎ倒す。

「この！」

凜はガントで敵を撃ち倒す。

「くそっ！何か方法はないのか！？」

近藤が焦る。

「斬っても斬ってもわいて出やがる！キリが無えぜ！！」

土方にも少し焦りの色が出る。

「ええい！こうなったら我の『エア』で……！！」

「あの素早さです。エアもかわされるかもしれない！」

セイバーがギルガメツシュを止める。

「ではどうしろと言っただ！？」

ギルガメツシュが怒鳴る。

「あの……！！」

新八が声を上げた。

「一つ、考えがあります！！」

第十訓：思いついたらすぐに実行しろ

えいりあんを倒す考えがある。新八の言葉に全員が一カ所に集まる。

「どんな考えだ？言ってみろ新八」

と銀時が言った。

「核を破壊するんです」

「核だと？」

ギルガメツシユが新八に聞いた。

「前に出た寄生型えいりあんは中枢の核を破壊して倒しました。このえいりあんにもその核があるならソレを破壊すれば倒せるはずですよ！」

新八がみんなに自分の考えを説明した。

「ヤツの体内に入って核を探して破壊するってことですかイ？」

「そうです」

新八が沖田に答えた。

「なるほど。しかも体内に入ってしまえばヤツはこちらに攻撃出来ない！素晴らしい案だ新八君！」

近藤が新八を褒める。

「でも全員で行くわけにはいかないわね」

凧が口を開いた。

「全員が体内に入ったらコイツらを止める者がいなくなつて被害は拡大するわ」

「つまり外でコイツらを食い止めるヤツが必要ってことか？」

長谷川の言葉に凧が頷いた。

「では私とギルガメツシユはここに残って、えいりあんを食い止めますしょう」

とセイバーが提案した。

「いいぞセイバー！我と愛の共闘をしようではないか！」「ギルガメツシユがテンションを上げてそう言った。

「いえ。愛はありません」

即答で否定するセイバー！

「で？誰が体内に入るんだ？」

長谷川がみんなに聞いた。

「銀さん。お願いします」

新八が銀時に言った。

「俺か？」

自分を指差して言った。

「はい」

「たくつ。しょうがねーな」
メンドくさそうに頭を掻く。

「上等だよ。えいりあん退治！やってやろうじゃねーか！」

銀時がビシツと決めた。

「トシ！行つてくれるか？」

「俺が？」

土方が驚いて近藤に聞き返した。

「ああ。頼むトシ！」

近藤に頼まれて土方はしばし考え。

「わかった。近藤さんの頼みじゃ仕方ねえ。行くとするか！」

土方も体内侵入を決意した。

「土方さん。もし体内で死んじまっても副長の座は俺が引き継ぎますんで安心してくだせエ」

「誰が死ぬか！！」

と沖田に怒鳴る土方。

万事屋からは銀時が、真選組からは土方が体内に入ることに決まっ

た。

「銀時！」

凜が銀時を呼ぶ。

「ん？」

呼ばれて凜に振り返る。

「これ。持っていくなさい」

そう言つて凜は赤い宝石を一つ差し出した。

「いいのか？」

「ええ」

「…そんじゃ」

凜の手から宝石を受け取る。

「行つてくるぜ」

「気をつけて」

そして銀時は前に向き直る。銀時の横に土方が立つ。

「足引つ張るなよマヨラー」

「それはこつちのセリフだ」

睨み合う二人。

「ところで、どうやって体内に入るんだ？」

と近藤が言った。

「我がヤツの動きを止める。その間にお前達は口から体内に入れ」

とギルガメツシュが言った。

「じゃあセイバーと神楽に二人を投げてもらいましょう」

「「え？」」

銀時と土方が冷汗を流す。

セイバーが銀時の腕を掴み、神楽が土方の腕を掴む。

「こつちは準備完了です」

とセイバーが言った。

「では行くぞ！」

ギルガメツシュが声を上げた。

「エルキドゥ天の鎖！！！」

ギルガメツシュがそう叫んだ瞬間、空間の歪みから鎖が現れて二重三重とえいりあんを拘束する。

「す…凄いい！こんな物まで…！」

山崎が驚く。

「急げ！この鎖は神性の高い者には強度は強くなるが、神性が無い者にはただの鉄の鎖だ！早くしろ…！」

ギルガメツシュが叫んでる間にも鎖にはヒビが入っていく。

「はああああ…！」

「ほあちゃあああ…！」

セイバーと神楽がそれぞれ銀時と土方をえいりあんの開いた口目掛けて投げる。

「あああああ…！」

揃って悲鳴を上げながら二人はえいりあんの口の中に入った。

バキイイイ

直後、えいりあんを拘束してた鎖がちぎれる。

「やはり長くは持たんか…」

悔しそうにギルガメツシュが言った。

「ですが二人は体内に入りました」

セイバーが再び剣を構える。

「さあ。私達もやるべき事をしますよ」

「僕達は小さいヘビとクローンを相手します！」

新八も鉄パイプを構える。

「頼んだわよ銀時」

「頼むぞトシ」

第十一訓：生き物の体内は未知の世界

外ではセイバー、ギルガメッシュが巨大えいりあんと戦い、万事屋、真選組が緑色のへびとクローンと戦っていた。

「あああああ!!」

銀時は巨大えいりあんの食道辺りを落ちていた。すべり台からすべり落ちるように落下し、突然広い所に出る。

「どわっ!!」

落ちてきた勢いで床にぶつかる。

床は、ぶにゅっと妙にやわらかかった。

「いてて…」

頭を押さえながら起き上がる。

銀時が落ちてきた穴と隣にもう一つ穴がある。

「おおおお!!」

そのもう一つの穴から声がする。

「おわっ!!」

穴から土方が落ちてきた。

「来たかマヨラー」

土方を見て言った。

「いてて…どこだここ?」

銀時と同じく頭を押さえながら周りを見る。

少し広く、ピンク色の壁からはヌルヌルした液が出ている。

「俺ら口から入ってきたから…」

銀時が顎に手を当てて考える。

「胃か？」

土方が言った。

「ってオイ！それじゃ俺達溶けて栄養にされちまうぞ！！」

「出口はねえのか！？」

慌てて二人は出口を探すが落ちてきた穴以外に出口はなかった。

二人は出口を探すのをやめて壁を見て立ち尽くす。

「たくつ。しょうがねーな」

と言いながら銀時は木刀を構える。

「出口がねーんなら」

土方も鞘から刀を抜く。

「「胃に穴開けたらああああ！！！！」」

二人は叫びながら壁に向かって木刀と刀を振るう。

ズバアアア

胃の壁は二人の剣によつて斬られ、大きな穴が開いた。

「行くぜマヨラー！！」

「だからテメーが仕切んな！！」

穴から胃を出て、えいりあんの体内を走る。

「核つてのはどこにあるんだ？」

周りを見ながら走り続ける。

「知るか！とにかく急いで探すぞ！！」

*

外ではえいりあんととの激戦が繰り広げられていた。

セイバーとギルガメツシユは巨大えいりあんと戦い、万事屋と真選組は人間並の大きさのヘビとクローンと戦っている。

そんな中。

「あの…ギルガメツシユさん？」

山崎がギルガメツシユに声をかけた。

「何だ！？」

ギルガメツシュが山崎を睨む。

「いや…あの…一つ聞きたいことがあります…」

ギルガメツシュの睨みにビビリながらも言った。

「だから何だ！？さっさとしろ雑種！」

ギルガメツシュが怒鳴る。

「あの…ギルガメツシュさんもセイバーさんみたいな宝具を持つてるんですよ？だったらさっきの鎖で、えいりあんを拘束してギルガメツシュさんの宝具を撃てば倒せるんじゃない…」

山崎がそう言つと。

「無理だ」

「え？」

ギルガメツシュの即答に山崎は首を傾げる。

「我の宝具『エア』は攻撃を放つのに時間がかかる。『天の鎖』は神性の無い者にはただの鉄の鎖だ。宝具を放つまでヤツを長時間拘束することはできないのだ」

苦い顔をしてギルガメツシュが説明した。

「そ…そうなんですか…」

「そんなことより雑種！貴様もさっさと周りのザコどもを片付ける！」

「は…ハイハイイ！！」

ギルガメツシュに怒鳴られ、山崎はミントンのラケット…ではなく、刀を持つて戦いに戻った。

*

巨大えいりあんの体内。

銀時と土方はまだ核を探して体内を走っていた。

「オイイイイ！いい加減にしるよ！走っても走っても核なんてどこにもねえじゃねーか！！」

イライラが爆発して銀時が叫ぶ。

「うるせーよ！文句言ってる暇があったら核探しやがれ！！」
足を止めて土方が銀時に怒鳴る。

「んだとコラ！えいりあんの前にテメーを退治してやるーか？」

「上等だコラ！」

二人が言い争う。

そんな言い争ってる二人に近づく影が一つ。

天井を這いずりながらゆっくりと二人に近づく。言い争う二人は近づくと影に気付いていない。

影は二人の真上に到着する。

影から緑色の液体が垂れる。液体は土方の肩に当たる。

「よーし！刀抜けコラ…ん？」

土方が肩についてる緑色の液体に気付く。

「何だコレ？」

肩についてる液体に触る。

「あ？どうした？」

「いや。肩に緑色の液体が…」

と言いながら土方は上に顔を向ける。そして目を見開いて驚く。

「おい。どうしたマヨ…」

銀時も上を見て言葉を失くす。天井には化物がいた。

へビのような頭で真ん中に大きな目が一つ。形は人型で体にはヌルヌルとした液体がついている。

「ギャゴオオオオオ！！！」

えいりあんが声を上げて襲い掛かる。

「うおおああああ！！！」

叫びながら二人とも跳んで避ける。すぐに二人は立ち上がる。

「何だコイツは！？えいりあんの中にえいりあん！？」

土方が腰の刀に手を構える。

えいりあんは四つん這いで二人を睨む。

「おい！アレ！」

銀時がえいりあんの頭を指差す。えいりあんの大きな一つ目の上、

額のところに小さな丸い心臓のような物が鼓動してる。

「まさか…アレが核か!？」

土方も額の核を見る。

「つてことはコイツが本体のえいりあんか!？」

「ギヤオオオオオ！」

えいりあんがまた叫び声を上げる。

「たくつ。ギヤーギヤーうるせーな」

銀時が腰から木刀を抜く。

「まったくだ」

土方も鞘からゆっくりと刀を抜く。

「沢山の餌を求めて地球に来たんだろーが」

死んだ魚のような目が獣の目になる。

「選んだ場所が悪かったな」

土方も鋭い殺気を放つ。

「ここを選んだことを後悔しやがれ!」

第十二訓：切り札は最後までとっておけつて言っけと使う前に終わつたら意味が

「行くぜ大串君!!」

「誰が大串君だ!?!」

二人は本体のえいりあんに向かって走り出した。

えいりあんは立ち上がって、両手を前に出す。

えいりあんの両手が伸びて先端はへびの頭となって銀時と土方に襲い掛かる。

二人は横に跳んで攻撃をかわす。

「うらあああ!!」

土方がえいりあんの伸びた腕を斬り裂く。ポトツと腕が落ちる。

えいりあんが斬られた腕を引っ込める。
ズツ

斬られた腕が再生して新たな腕が生える。

「何!?!」

土方が驚く。

「ピツ　口さんかお前は!!」

銀時がえいりあんと距離を詰める。

えいりあんの肩がウニウニ動く。

「!?!」

銀時が足を止める。

えいりあんの肩から大きなへびの牙のような物が出て銀時に襲い掛かる。

「うおっ!!!!」

後ろに跳んで牙を避ける。

「野郎！全身が武器か！？」

土方も一旦、後ろに下がる

すると、えいりあんは大きく口を開く。ゴポツと口から緑色の液体が少し漏れる。

そして次の瞬間。

ドシューウウウ

えいりあんの口から物凄い速さで緑色の線が銀時と土方目掛けて放たれた。

「く…！」

二人は上体を反らして緑色の線をかわす。チツと緑色の線が頬に掠って血が出る。

ドガアア

爆発音のような大きな音を立てて緑色の線が床に当たる。

「おいしい！何だよ今の！？ビームか？ビームなのか！？」

銀時が動揺する。

「！」

土方が床に飛び散ってる緑色の液体を見た。

「今あいつが飛ばしたのは体液だ」

「体液？」

銀時が目を細める。

「体液を圧縮してレーザーのように飛ばしやがったんだ。しかも見る」

土方が顎でえいりあんの足元を示す。

えいりあんの足は体内の床に根付いてるように一体化してる。

「ああやってこのデケーえいりあんの体内から体液を補給してるから何発でも撃てるぞ」

「冗談じゃねーぜ。あんなのを何発も撃てるなんてよ」

銀時が木刀を構え直す。

えいりあんが再び口を大きく開く。

「またかよ！」

銀時と土方が走り出すと。

ドンドンドン

連発して圧縮した体液を飛ばす。

「大串くうつん！連発で撃てるなんて聞いてねーぞ！」

攻撃をかわしながら銀時が叫んだ。

「うるせー！俺だって知らねーよ！」

銀時に怒鳴り返す。

えいりあんが体液の攻撃を止めて左手を土方に向けて前に出す。

えいりあんの左腕は無数の緑色のへびとなって土方に襲い掛かる。

「ちっ！」

襲い掛かるへびを斬り捨てる。

その隙に銀時はえいりあんに一気に近づく。

えいりあんの頭の核を狙って上段から木刀を振り下ろす。

直後、銀時の顎に衝撃が走る。銀時の顔は上を向いて、体が宙に浮く。

「万事屋！！」

銀時を見て土方が叫ぶ。

銀時は下を見る。

床から腕のような物が生えていて、それが銀時の顎を攻撃したのだ。
ガッ

えいりあんが銀時の首を掴んだ。

「ぐ…！」

えいりあんの手をほどこうとするが、びくともしない。攻撃しようにも、えいりあんの腕は伸びていて木刀では届かない距離だった。土方は襲い掛かるへびに苦戦していた。

「ギャゴオオオオ！！！」

えいりあんが勝ち誇ったように叫ぶ。

銀時の首を締める力が強くなる。

「ぐあああ…！！！」

口から涎を垂らして苦しむ。

「邪魔だ！どきやがれエエエ！！」

土方が一振りで沢山のへびを斬り裂く。えいりあんに向かって走る。えいりあんの周辺の床から二体の大きなへびが現れて土方に襲い掛かる。

「ちい…！！」

へびの突進を刀で受け止める。

えいりあんが土方に向けてた顔を銀時に戻す。

銀時はえいりあんを睨みつけたまま左手を着物の中に入れる。左手を着物から出すと、手には凜から受け取った宝石が握られていた。えいりあんが首を傾げる。

「…そんなに食いたきゃ…とっておきのアメをくれてやらあ」
そう言つて銀時はピンツと宝石をえいりあんに向けて飛ばした。

宝石はえいりあんの顔に当たり。

ドガアアアア

宝石が爆発した。

第十三訓：終わりは意外とあつけない

寶石がえいりあんの顔に当たり爆発した。

「ピギヤアアア！」

悲鳴を上げて銀時の首を掴んでた手を離し、両手で顔を覆う。

えいりあんの手から解放されて銀時は走り出す。

えいりあんが銀時の接近に気付き、右手を巨大なへびに変えて攻撃する。

巨大へびが銀時に迫る。

ズバツ

えいりあんの腕が斬れて巨大へびが床に落ちる。えいりあんが視線を銀時から外すと額から血を流した土方がいた。土方の後ろには二体の巨大へびの死体があつた。

「行けえええ！万事屋あああ！！！」

土方が叫んだ。

銀時はえいりあんの目の前まで迫る。

「うおおおお！！！」

雄叫びを上げながら木刀を突き出す。

ズガツ

木刀は額にある核を貫いた。

「ピギイイイ！！！」

えいりあんは悲鳴を上げて頭を押さえる。

えいりあんの体はドロドロと溶けていく。銀時と土方はえいりあんが溶けていく様子を見つめる。

えいりあんの体は完全に溶けて、床には緑色の水たまりが出来た。

「終わったのか…？」

土方が刀を鞘に納める。

「ああ…」

銀時も木刀を腰にさす。

その時。

ゴゴゴゴゴ

体内に音が響く。

「何だこの音？」

銀時が体内を見回す。

「おい…」

土方が冷汗を流す。

「このえいりあんって死んだら液体になるんだよな？」

青ざめた顔で土方が言った。

つまり、このままえいりあんの体内にいたら…。

「脱出だあああ！！早くここから出るんだあああ！！」

慌てて銀時が走り出す。

「出口はどこだあああ！！」

土方も叫びながら走り出す。

*

「ゴアアアアア！！」

巨大えいりあんが突然苦しみます。

「何だ！？突然苦しみましたぞ！？」

近藤が巨大えいりあんを見上げて言った。

「もしかして銀時達が！？」

凜も巨大えいりあんを見上げて声を出した。

「銀ちゃんやったアルカ！？」

巨大えいりあんは体を捻りながら苦しみ、やがて力尽きて地面に倒

れた。他のクローンや緑色のへびも全部倒していた。

「やったあああ！副長達がやったんだああ！！」

山崎が両手を上げて喜ぶ。

「あれ？でも…」

新八の顔が曇る。

「このえいりあんって死んだらドロドロした液体になるから、このままだと中にいる銀さん達は液体に飲み込まれちゃうんじゃない…」

全員の視線が新八に集まる。数秒おいてえいりあんに向き直る。

「銀時イイイ！！！」

「トシイイ！！！」

凧と近藤が同時に叫んだ。

直後。

ドバアアア

巨大えいりあんはドロドロとした液体に変わる。

「ああああ！！！」

凧と近藤が頭を抱えながら叫んだ。

ドロドロと緑色の液体は周りに広がる。

「銀さあああん！！！」

新八が銀時の名前を叫んだ。

ドパッ

緑色の液体から手が出る。

「！！！」

全員が出てきた手を見る。

「ぶはあああ！！！」

銀時と土方が液体から出てきた。

「銀時！！！」

凧が銀時の名を叫んだ。

「トシイイ！！！」

近藤も涙目で叫んだ。

「ぺっぺっ。ドロドロして気持ち悪っ！」

「うげっ！口の中に…！！」

体中緑色の液体でドロドロになりながら皆の元に歩いていく。

「銀時！」

凧が銀時に駆け寄る。

「おお。凧」

銀時が凧に気付く。

「銀さん！無事だったんですね！」

新八が駆け寄ると。

「テメツ新八いいい！！お前のせいで死にかけたぞコラアアア！！」

銀時が新八に怒鳴る。

「ええっ！？」

「何が体内なら敵は攻撃できないだよ！メチャクチャ攻撃されたぞ

ダメガネ！！」

「ちよっ…！それを言ったのは近藤さんですよ！！」

銀時が新八を怒鳴り続けている隣で。

「トシ！よく生きて帰ってきてくれた！」

土方の肩に手を置いて近藤が言った。

「まあ。ちよつと手こずったがな」

と言いながら土方はタバコに火を付ける。

「液体の中で溺れ死んじまえばよかったのにねえ」

「テメーを溺れさせてやるーか総悟おお！！」

沖田と土方の争いが始まった。

「そつだ凧」

新八に怒鳴り終えて銀時が凧の方を向く。

「何？」

凧が首を傾げる。

「宝石ありがとな。助かったぜ」

微笑んで凧に礼を言った。

「礼なんていらぬわよ。銀時が帰ってきてくれれば…」

顔を赤くしながら凧が慌てて答えた。

離れて万事屋と真選組の様子を見てるセイバーとギルガメツシュ。

「やれやれ。騒がしい連中だな」

ギルガメツシュがため息を付く。

「まあいいじゃないですか」

セイバーが笑いながら言った。

えいりあんとのは戦いはこうして幕を閉じた。

第十四訓：もう終わり？早っ！！（前書き）

桂「無事だったかエリザベス！」

エ「桂さんも無事

でよかった」

桂「うむ。おっと読者の諸君。後書

きもちゃんと読むのだぞ！」

エ「読んでね」

第十四訓：もう終わり？早っ！！

壊れた別荘の地下に空いてた大きな穴に捕まった江戸の住民が見つかり、万事屋と真選組によって救出された。

数日後。

江戸は元の平和を取り戻していた。住民もみんな元気になり、働き遊び、街は賑やかだった。

万事屋。

「ひゃっほーう！見るよこの金！」

喜びながら銀時は分厚い札束の入った封筒を手取る。

「こんなにガツポリと報酬と礼金をもらったぜ！」

「フッフ！私に感謝しなさいよ銀時！」

「おうよ！」

銀時と凜は大喜びではしゃぐ。

「酢昆布食べ放題アルヨー！」

「何かおいしい物を食べましょう！」

神楽とセイバーも喜ぶ。

幕府からの”ハタ皇子の様子を見に行ってくれ”という依頼の報酬を手に入れ、さらに救出したハタ皇子を凜が巧みな話術で丸め込んで礼金をいただいたのである。

「これで、たまつてた家賃も払えますね」

新八がそう言うと。

「バカヤロー新八！家賃を払ってもまだまだ有り余るぜ！人生バラ色だあ！」

*

真選組屯所。

「いやあみんな無事でよかった！」

隊士達を見て近藤が喜ぶ。

「局長！副長！隊長！すいません！俺達が不甲斐ないばかりに迷惑をかけて！！」

隊士が近藤達に謝る。

「バカヤロ！。死なれてた方がもつと迷惑だ」

そう言つて土方はタバコの煙を吐く。

「そうですぜ。死ぬなら土方が死んでくだせエ」

「テメーを死なせてやる！か総悟」

土方が沖田を睨んだ。

真選組も平和だった。

*

二日後。

「おいコラー！」

万事屋に銀時の声が響いた。

「俺がしまつておいた大金が姿を消した。盗んだ奴は正直に言え。今なら四分の三殺して許してやる」

額に血管を浮かべて銀時が言った。

「四分の三つてほとんど死んでるじゃないですか。っていうかちゃんとお金の管理してくださいよ！」

と新八が言った。

「王の我はそんなコソ泥のようなマネはせんとギルガメツシユ。」

「私の酢昆布食べ放題はどうなるネ！？」

「犯人を見つけてお金を取り返しませう!!」

神楽は大声を上げ、セイバーは鎧姿になっている。

「ん〜。お前らの中に犯人がいないとすると…」

と言いながら銀時は視線をある人物に向けた。

銀時の言葉と視線にその人物は体をビクツと震わせる。

「凜」

銀時が視線の先の人物の名前を呼んだ。

「な…何？」

凜が笑顔で聞いた。その顔には冷汗が流れていた。

「お前か？金盗ったの？」

銀時がゆつくりと凜に歩み寄る。

「え〜？私もわかんないわ」

目を泳がせて凜が答える。

「おい。こつち見るコラ」

「ああ！私もう一回部屋の中探してみるわ!!」

凜が立ち上がった時。

ガラガラ

凜のポケットから何か落ちた。しまった、という顔で凜が床に落とした物を見る。

床には色とりどりの宝石が落ちてた。

「凜…」

銀時が下を向いたまま凜の名を呼んだ。

「お前…」

ゆつくりと顔を上げる。

「宝石買ったのか…？」

静かに銀時が言った。

「ああ…」

一歩下がりがりながら凜は周りを見る。全員が軽蔑の眼差しで凜を見ている。

凜が銀時に向き直る。

「ごめんなさい」

観念して凜が謝った。

「ごめで済むかああああ!!!」

テーブルをひっくり返しながら銀時が叫んだ。

ハタ皇子とじい。

「もう地球に来んのやめよう」

「左様でございますな」

えいりあん来襲篇・完

第十四訓：もう終わり？早っ！！（後書き）

前作以上にグダグダな気がする『えいりあん来襲篇』いかがでした
でしょうか？

楽しんでいただけただけでしょうか？

はたして続編はあるのかな？もう全然わかりません（
笑）

最後まで読んでくれた皆さん、ありがとうございました

！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5442g/>

銀魂/Fate えいりあん来襲篇 えいりあんVS万事屋&真選組！侍ナメんなコノ

2010年10月10日19時36分発行